

徳島県立近代美術館企画交流室長
森 芳功 の



美術の時間
コシノミヤ
の時間

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その98 一人一人の感覚を大事にするデザインと美術館

香りを楽しむウエルカムスペース

徳島県立近代美術館で開催中の「暮らしの感覚ーアートと人とデザインが交流する空間」展をご紹介します（九月四日まで、担当…竹内利夫上席学芸員、亀井幸子係長）。「身近なテーマの美術作品を、居心地を工夫した様々な空間でご覧いただける」今までとはひと味違った展覧会です。

まずチケットを買って会場ロビーに入ると、香りを楽しむウエルカムスペースがあります。六つの小瓶の香りから連想する暮らしの思い出をカードに書き、パネルに貼ることができるコーナーです。「木と草花」「住まい」「食べ物飲み物」「季節と風土」など六枚の白いパネルは、色とりどりのカードで少しずつ華やかになっていきます。

目と頭に重きを置きがちな美術鑑賞に香りの要素が加わると、感性が活性化するのはないでしょうか。ここでは香りが暮らしの情景を思い起こすきっかけとなりますので、鑑賞のウォーミングアップになるようです。

複合的な感覚がはたらいととき、記憶は味わいを豊

かにしていきます。私は、東京や大阪の街を歩いているとき、以前訪れたヨーロッパの古い町の小さな美術館を思い出すことがあります。どこからかかすかに香る香水の仕業です。時間と場所の異なったものが突然結びつき、ふだんは気にしていない記憶のなかの風景が彩りを取り戻します。そのような香りのはたらきを一つの活性剤にして作品鑑賞をするのも興味深く感じます。

畳に座って屏風を見る

展示室に入ると、ガラスケースのなかに掛軸や屏風の作品が並び、その前には、畳を敷いた三畳ほどの小上がりがあります。靴を脱いで上がってもいいのです。目の前にあるのは広島晃甫による六曲一双屏風（鳥鷺図）（一九三四年）。私は何度も見ているはずなのですが、小上がりに座り、低くなった視線から見ると作品の印象が変わるので少し驚きました。いつものように立って見るときより堂々とした大きな作品に感じられたのです。

この作品は、縦が一七六センチ、横は四二二センチの屏風が対となったもので、元は東京の目黒雅叙園にあった広いお座敷で使われて

いました。畳に座った視点から見るとして描かれた作品なのです。

屏風や掛軸が美術館のコレクションになると、本来使われていた広間や床の間から切り離され、展示室の白い壁面に飾られることとなります。そうなること、元々作品とともにあった環境や楽しみ方が失われてしまう点があるのは致し方ありません。それを補うため、展示室に本格的な床の間などをつくり出すとしても費用的に難しいのですが、今回のように仮設の台があるだけで発見が得られるのを知りました。

展覧会場のダイニングチェア

さて、「暮らしの感覚」展の大きな魅力は、会場にあるさまざまな椅子でしよ。いつも美術館に置かれている休憩椅子ではなく、ダイニングチェアのような椅子なのです。いろいろな種類の椅子がありますので、お気に入りの椅子でゆったりと過ごす人がいます。監視員さんに聞くと、半日椅子に座って見ている人がいるとのこと。ふつう美術館にある休憩椅子は見たい作品の前に置かれているとは限りません。ところが今回の展覧会では、お好みの

絵の前に椅子をもつていき、ゆっくりと鑑賞することができるのです。

来館者でござったがえす美術館ではまず不可能な企画といえます。そうでなくても、美術館では立って見るのを強いられますので、体力がなければ長時間見学するのは難しい状況もあります。世界中似たようなところがあるらしく、海外のアーティストが、あまり行きたいと思わない財務省の建物と美術館を重ねて語っているのを読んだことがあります。せっかく来館したのに、ゆっくり作品を見ることなく、早々と帰ってしまふことになれば、作品と対話するチャンスも逃してしまいかねません。

今回の展覧会でゆったりした気持ちになれるのは、椅子自体の魅力も関係しています。日常の感覚に合ったおしゃれなダイニングチェアが選ばれているからです。イタリアで学んだ村澤一晃さんがデザインした椅子は、丸みを帯びて見るからにやさしそうな姿をしており、「座ってみればさらに、使い込んだ古い道具のように指先と馴染む感触」があります。武蔵野美術大学教授でデザイナーの小泉誠さんによるシャープな線の椅子は、「座った体

勢をごく自然にサポートしてくる「使い心地がある」といいます（竹内学芸員・同展図録原稿）。ちなみに、村澤さん、小泉さんがデザインした椅子を製作したのは、徳島の会社、宮崎椅子製作所。デザイナーとともにワークショップ形式で素材や形を検討するユニークな活動を続けています。

器に触れて絵を見る

他にも普通の展覧会とは異なる工夫があります。手で触ることのできる器がある点もそうでしょう。触覚を通して日常的な感覚を蘇らせるしかけといえます。徳島の会社SUEKI CERAMICSから協力を得て、地元鳴門市大谷の土や上葉に阿波の青石などを使ったシンプルでデザインされた焼き物が置かれています。大きさや色の違ういくつかの器を触り、普段の食卓を思い浮かべな



「暮らしの感覚」展チラシ



オープニング「アクティビティ」のようす

本展でも、さまざまな関連事業を行っています。そのうちのひとつ、小泉誠さんのデザインートーク「暮らしとデザインをつなげる」（七月二十三日）を聞きました。心地よいデザインについて考えさせられる内容でした。

たとえば椅子をデザインするとき、強度的には細い足で丈夫な場合でも、安心感がほしいときは太くするといえます。違いは感覚的なものといえるのですが、心地よいデザインと効率的生産は一致しないことに気づきます。

韓国の伝統的な大工さんは、仕事ごとに独自の物差をつくり、完成したらそれを家に残して後の修理に使えるようにしているという話もありました。何メートル、何センチという定められた基準に拘ってはいないのです。近代建築の巨匠の一人、ル・コルビジェも「モデュロール」という建築に求められる比率をつくり、抽象絵画のように見える独自のメジャーをつくったことはよく知られています。ですがその基準となつたのが彼自身の身

長だったといえますので、一八二・九センチと身長だったルビジェと昔の韓国の大工さんであれば、つくられたものの長さや空間から受ける印象は異なつたものとなつたはず。小泉さんのレクチャーは、そのような一人一人の感覚を大切にデザインについて考えるきっかけとなりました。

お話を聞き、私はユニバーサル・ミュージアムの考え方と共通するものを感じました。一つの基準や価値観から社会をデザインするのではなく、一人一人が使いやすいよう模索する傾向は、さまざまな分野で重なっているようです。

作品を展示し観客を集める施設としてつくられている美術館には、機能として二十世紀の「大量生産大量消費」時代のイメージが強く残っています。そこからどのように新しい美術館像を生み出していくのか、世界中でさまざまな議論や試みがあるなかで、ささやかながらも今回の展覧会は、一つのチャレンジとなつているように思います。

みなさんも試しにお気に入りの椅子を探し、ゆっくりと作品をご覧ください。

リラックスした感覚のなかから、今までにない作品との出会いが得られるかもしれません。

8月の催し

■特別展「暮らしの感覚—アートと人がデザインが交流する空間—」

9月4日「日」まで

・託児つきババママアワー（鑑賞ツアー）5日「金」11時〜（45分くらい）要申込

・ウェルカムツアー（学芸員によるみどころ案内）11日「木・祝」14〜15時

・ベビーカーアワー（鑑賞ツアー）26日「金」11時〜（30分くらい）

・絵画と演劇のワークショップ 19日「金」・20日「土」13〜16時

・要申込（10日締切・20名先着順）フアシリテーター…わたなべ なおこ（あなざーわーくす主宰）

■所蔵作品展 2016年度第Ⅱ期「特集1 立つこと、座すこと、歩むこと」「テーマ展示 戦後徳島美術」

・テーマで知る名品「焼け跡からの出発」7日「日」14時〜（45分くらい）

■連携展示「阿波の道を歩く 芭蕉をめざした男 酒井弥蔵×現代アーティスト 大久保英治展」会場：文化の森各館 28日「日」まで（図書館は21日「日」まで）

□文化の森サマーフェスティバル アートくつろぎ広場…美術館で遊ぼう

21日「日」9時30分〜16時

※各催しについて詳しくは当館ホームページで